

カルダン社、東京、一九七六

4. 印具備、益田健次ほか 論文集、宗教改革研究 P. 一五

三 新教出版社、東京、一九六八

5. Charles D. Onalley Michael Servetos, American Philosophical Society: Philadelphia, 1953

6. Owsel Temkin Was Servetos influenced by Ibn-An-Nafis? Bull. Hist. Med. 8: 731-734, 1940
(平成九年五月例会)

アラブ医学者の名前

泉 彪之助

演者は、中世のユダヤ人哲学者・医学者モーゼス・マイモニデスの生涯を調査している間に、多くのアラブ医学者の名前に接した。その成り立ちと表記について考えていたところ、ビュステンフェルトのアラブ医学・科学史の序文に、アラブ医学者の名前の詳しい解説があることを知った。とくに興味深かったのは、イブン・ズフル・アベンズアル、イブン・スリーナ・アビケンナというようなラテン名の起りだが、アラビア語を表記するのにヘブライ文字を用いたスペイン・ユダヤ人の言語慣習から来たという指摘であった。このことを中心にアラブ医学者の名前について考えて見たい。演者の知識はまだまだ未熟で、ここにのべるのは一種の試論と理解していただきたい。

アラブ医学者の名前を記載する場合の問題点は、(1)アラブ名を用いるかラテン名か、(2)アラブ名ならば、イブン・スリーナのような簡単な表記かフルネームか、(3)フルネームならどの文献によるか、(4)アラブ医学者の名前はどんな構成か、(5)日本語表記はどのようにするか、などである。これらの問題のうち、ラテン名を持つアラブ医学者は数が限られ、また簡単な表記では混同が起るので、アラブ名のフルネームとラテン名の併記が必要であった。信頼できる新しい英文文献を入手できず、一八四〇年初刊のビュステンフェルトの古典を根拠としたため、ローマ字表記が現在のものと一部異なっている。

アラビア語およびヘブライ語は、アラビア語のアリフを除きほとんどの文字が子音を示し、母音は発音符号で示されるので、読解が困難でローマ字表記も多様となる。とくにアラビア語は、語形や発音に変化を起すことが多い。

ビュステンフェルトによれば、アラブ医学者の名前は次のような構成から成る。

(1) 息子の名前(の父) (abu)、(2) 本人の名前、(3) 父の名前(の息子) (ibn or ben)、(4) 祖父または先祖の名前 (ibn or ben)、(5) 付加名(多く al)

(ビュステンフェルトは、名前の途中では ben (ibn の省略形)、名前の最初では ibn としている。ただし現在のアラブ人は、ibn という言葉は普通使わない)

このうち、息子の名前とされるのは、必ずしも実際の息子の名でなく比喩的な名の場合もある。父あるいは祖父の代わ

りに、有名な先祖の名前が用いられることがあり、このときは一種の家系名となる。アラブ医学者には、しばしばこの形が見られる。付加名としては(1)出身地、(2)部族名、(3)身体的特徴、(4)本人または父の職業、(5)所属する宗派、(6)榮譽名などがある。

アラブ文化がヨーロッパへ伝えられたルーツとしてもっとも重要なのは、スペインのコルドバおよびトレドだが、このとき初期にはしばしばユダヤ人がアラビア語を翻訳し、それをヨーロッパから来た学者が洗練されたラテン語にしたといわれる。イスラム世界に生活するユダヤ人は、日常用語にヘブライ文字を用いたアラビア語(ユダヤ・アラビア語)を使用していたので、このような役を果たすことができたのである。

アラブ医学者のラテン名には、アラブ名の音をそのまま写したものと、冒頭にのべたような *ihn* → *aven*, *avi*, という形、その他がある。アラビア語の *ih* をアラビア文字、ヘブライ文字で書くと、それぞれ アリフ・バー・ヌーン、アレフ・ヴェート(ベート)・ヌンソフィートとなり、アリフがア・イ・ウの三母音をほぼ平等に示すのに比べて、アレフは理論上はすべての母音と結び付くがア、エの比重が大きい。またバーは b の音だけを示すが、ヴェート(ベート)は v、b の音を示すので、*ihn* → *aven*, *aben* の変化が起こりうる。ピュステンフェルトは、n が消えた *ihn* → *avi*, *ave*, *adi*, *ade* の変化は、アラビア語の *ih* (息子) を *abu* (父) と誤認したためという。なおアレフ・ヴェート・ヌンソフィートをそのままヘブライ

語として読むと、*aven* (石) という語となる。

アラブ名の日本語表記には種々の困難があり、一つの方法に統一できないことを最後にのべた。

(平成九年六月例会)

八丈島に流された医師たち

一 八丈島流人銘々伝より一

中西 淳 朗

一、伊豆の八丈島に流罪となった最初の人は、宇喜多秀家である。しかし着島した一行は十三名で、その中に、秀家の妻・豪姫の実家である加賀藩前田家より命ぜられて、同行した藩医の村田助六がいる。

秀家が死去した後も帰国の許可が加賀藩よりおりず、代々、島にあって慶長十一年から明治二年まで、約二百六十五年間、宇喜多家を守った。しかし第二代以降も医師であったかは不明である。それは村田氏は宇喜多家とその郎党以外は診療しなかつたからだろう。また薬物についても前田家より差入れがあつたとみられるので、この村田氏という医家は別格とした方がよいと思う。

二、村田氏をのぞくと、寛保元年(一七四二)より嘉永二年(一八四九)までの間に、八丈への遠島判決をうけた医師は九名で、途中死亡が二名あり、着島した医師は七名である。その内訳は町医三名、幕府お抱え医三名、藩医一名で、このう